

友へ

森 美樹子

〈LINE/2022年10月*日〉

聡美、元気？ 久しぶりに明日から帰福します。X日の土曜日までいます。塾は相変わらず忙しいのでしょうね。空いている時間がありますか。少しでも会えたら嬉しいです。でも、無理はしないでね。 万智子

コロナ制限が少し解除されたので、福岡へ帰省する予定だ。父が亡くなって五年。昨年転倒・骨折した母は、足を引きずりながらも、なんとか福岡で一人暮らしを続けてくれている。コロナ以前はほぼ毎月帰省していたが、突然のコロナ禍でままならなくなった。この自粛期間、母はさぞ心細かっただろうと思う。東京から福岡は遠い。

福岡で高校の同級生だった聡美と会うのは、いつも帰省中のわずかな時間になる。わたしは母との時間が優先にな

るし、英語塾を経営している聡美のスケジュールは、ちよつとしたタレント並だからだ。

高校一年生の時、聡美とわたしはたまたま席が近くだったのをきっかけに、交換日記まで交わす友人になった。日記の一行目はいつも「元気？」だった。毎日会っているのにおかしな話だが、あの頃は、その日の天気や小説の一行によっても気分が浮き沈みしていたのだから、不思議ではない挨拶だったと思う。

わたしは彼女との会話の中で、ざらつきを感じたことがない。社会への青い憤りや未熟な感情の揺らぎ……。話題は尽きることがなかった。いつも口数はわたしの方が多く、彼女はどんな時でも面白がって聞いてくれた。卒業後、進む道は違ったけれど、反かえってそれが良かったのか、お互いの大学生活や社会人としての話題が加わり、さらに近しい



友人になった。結婚、子育てなど一通りの慌ただしさの中、
会えない時期もあったが、電話や手紙で、スマホを持つよ
うになってからはラインでやり取りをしてきた。

コロナ禍で会えなくなって久しい。今回の帰省中に、少
しの時間でも会えるといいのだが……。

◆
〈LINE/2022年10月*日〉

万智子、久しぶり！ お帰りなさい。日々、仕事の変則
的なスケジュールに四苦八苦しています。調整してみ
るね。少し時間をください。また連絡します。 聡美

万智子は気遣いの人だ。ラインをくれるのは、わたしの
仕事が終わる九時すぎ。いつもわたしの都合を優先してく
れる。しかも、約束には断りやすい筋道を用意しておいて
くれる。変わらない彼女の優しさに、一方的に甘えている
わたし。けれども、ここ数年、万智子の存在に紗しやがかかっ
たような頼りなさは何なのか。彼女の実像を想像力で補う
のにも、疲労を覚えるようになった。コロナ禍のせいだろ
うか。

手帳を開いて金曜日までの予定を確かめる。毎日の授業、
小学校の英語教育導入に伴うクラス再編成やテキストの見

直し。さらに、慣れないリモート授業の準備。夜は自宅で
高校生の個人授業もはいつている……。

一体、わたしはいくつ会えない言い訳をあげつらえば気
が済むのだろう。すぐに断る後ろめたさから逃れるため、
少しの猶予を願い出たわたしは姑息だ。

◆
〈LINE/2022年10月*日〉

ごめん、時間がとれそうにないのよ。
次に帰ってくる時、必ず教えてね。

聡美

◆
第一線で働く人の忙しさは分かっているつもりだ。けれ
ども、理由がどうであれ、断られる寄る辺なさに慣れるこ
とはない。スマホの画面上で処理されるのも、なんだか侘
しい。

高校時代からブレない聡美の想いは、英語に関わる仕事
に就きたい、だった。一年生の時の担任が英語の先生で、
リズムカルな響きやパズルを解くような文章の構造などを、
楽しく厳しく教えられた。聡美が一生の仕事として語学を
選んだのは、この時の経験があったからだと思う。大学は
英語科を専攻し、大学在学中もバイトをしながらダブルス
クールで語学専門学校へ通っていた聡美。本格的に語学を

志す多くの人が留学を選択するが、母子家庭だった彼女にその選択肢はなかった。卒業後は大手英語塾の講師をスタートに、パートナーの宏志さんと英語塾代表へとステッアップしてきた聡美。彼女のたくさんの努力と覚悟を、わたしは知っている。早々とキャリアや経済的自立から撤退したわたしにとって、聡美はリスペクトでしかない。

わたしは大学卒業後、大阪の製薬会社でMR（医薬情報担当者）として働いた。若さに任せ、ハードな働き方を厭わなかった。男性上司からの労わりは体のいい差別だと感じた。大型のショルダーバッグは資料とノートパソコンでパンパンに膨れ、肩懲りや眼精疲労は慢性化していた。週単位、月単位で評価される企業の論理に縛られる日々。もともと丈夫ではなかった胃腸の不調を自社の薬で凌ぎ、ストレスはスイーツの食べ歩きで解消し、ささくれた気持ち化粧と流行のスーツで隠した。不健康を絵に描いたような毎日だった。

勤め始めて五年。出勤前にいつも立ち寄るスタンドの珈琲を苦く感じた時、ふと浮かんだ〈退職〉という文字が日ごとに増殖して、三か月後、辞表を提出していた。所詮、MRという職種への興味も、キャリアを全うする覚悟もなかったのだ。なんと見栄っ張りな女だったのだろう。退職後、福岡の実家に戻ったものの、新たな生活設計があった

わけではなく、コンビニでアルバイトをし、裏庭で野菜作りをした。マニユアル化された労働と土の力が、わたしを初期化してくれた。

会社の同期だった和真と結婚したのは、退職して二年ほど経った時だ。わたしたちは入社してすぐの二か月間、ホテルにカンヅメになって研修を受けた。おそらく人生で一番勉強をした二か月間だったと思う。おかげで二十人の新入社員は、膨大な薬学に関する知識に加え、連帯感という副産物を得たのだ。わたしと彼との間にあったのは、同志のような感情だったと思う。

退職後、和真とは時々メールのやり取りをしていた。彼が福岡出張の時に食事をしたり、わたしが好きだったサザンの大坂コンサートに付き合ってもらったりしているうちに、お互い、一緒にいるのが心地いい存在になっていた。結婚後は彼の転勤に伴って、各地を転々とした。二人の息子は、どんな環境にも対応できるタフな人間に育てた、つもりだ。

子育てが一段落した四十代半ば、暮らしの悲喜こもごもやちよつとしたあれこれを、気ままにブログで発信するようになった。それが小さな出版社の目に留まり、半分以上出版の形でエッセイ集が上梓された。聡美は「夢が叶ってよかったね」と、手放して喜んでくれた。覚えていなかった

だが、高校生のころから「本を出したい」と夢語りをしてきたようだ。エッセイ集は出版社に損をさせない程度に売れたようで、今年、続けてきたブログの中からセレクトした二冊目の本ができた。聡美には是非読んで欲しい。聡美との会話からインスパイアされたエピソードもいくつかある。(ああ、あの時のあれね)、聡美はきっと、そう言うだろう。今回の帰省は、聡美にサブライズで本を届ける意味もあったのだ。

人と人との関係は川の流れのようなもの。聡美とわたしは同じ風景を見て心を動かし、同じ本を読んで共感し、同じ川を流れてきた感覚がある。たとえ分岐した流れを揺蕩う時期があったとしても、わたしたちは同じ海に流れ着く、そんな安心感があった。いつものように、聡美の通勤途中の駅近くでいい。お互いの元気を確かめ、心が動いたちょっとした何かをおしゃべりする。時代を共にした彼女との会話には、原点へ回帰するような懐かしさとほろ苦さが入り混じる。たとえそれが生産性のない刹那の感情だったとしても、わたしにとってはかけがえのない時間なのだ。

さつき、聡美から届いた断りのライン。最近彼女からのラインの行間に、寒々しさを感じるの気のせいだろうか。彼女はわたしのことを、勝手な帰省時にラインをよこし、一方的に時間はないかと聞いてくるお気楽な女だと感じて

いるのではないか。彼女が背負ったシビアナな状況に対して、あまりにも能天気で無神経なわたしに愛想を尽かしているのか……。疑心暗鬼に陥りそうな気持を、きつとコロナのせいと打ち消し、返信した。

会えなくて残念だけど、仕事だからしょうがないね。あまり働きすぎないでね。宏志さんの体調はいかがですか。どうぞお大事に。

万智子

個人授業を予定していた高校生から、体調が悪いのでお休みをすると連絡があった。先週はわたしのダブルブッキングのせいで、レッスンがとんだ。間が悪いことは続くものだ。ぼっかり空いた時間、引きこもって来期の授業計画を立てようか。もう長い間、資料は散らかったままだ。

台所で、夫の宏志が夕食の支度を始めた。今朝、夫との連絡用の黒板に夜の献立を「カレー」と書き込んだ。カレーは宏志の得意料理だ。わたしはレシピノートと食材を用意しておけばいい。

夫の宏志は、わたしが勤めていた英語塾に出入りする教材会社の営業マンだった。何度か食事に誘われた後、近い将来は英語塾を開くつもりであり、プライベートでもパブ

リックでもパートナーになって欲しいと、プロポーズされた。宏志の営業手腕と英語教育に対する情熱に惹かれ、彼と同じ夢を追う決心をした。小・中学生を対象に、ビルの一室から始めた塾を順調に成長させ、四件目の開室準備に追われていた六年前、車で移動中だった夫は、一方的なものでない事故に遭った。車は大破し、一命は取り留めたものの左半身の運動障害と高次脳機能障害が残った。リハビリで運動機能はかなり回復したが、認知の機能は戻らなかった。一人息子の理人(まさと)が県外の全寮制の高校へ通っていたのは不幸中の幸いだった。勉強に専念できる環境を用意するのが親の役目だと、常々話していたのだ。障碍者になった彼と毎日向き合うのは、わたしだけでいい。

事故後、わたしは仕事関係のすべてと日常生活の段取りを、夫はリハビリを兼ねて可能な範囲の家事を受け持つというパターンができていった。帰宅が遅くなろうと休日出勤になろうと、彼は何も言わなかった。無言という意思表示の中にとれほどの深い思いがあるのか、塾を維持するのにいっばいで、考える余裕などなかった。少しの緩みも許されない毎日、脳内アドレナリンが支えてくれた。行動範囲は、リハビリ施設と自宅とがほとんどの夫。まだ五十年代。働き盛りの彼が抱える苦悩の一番近くにわたしはいる。なのに、響く言葉一つかけることができない。人の、わた

しの想像力の貧しさを、嫌というほど思い知らされる。宏志との日々を語れば苦勞の自慢になりそうで、万智子にも多くを話したことはない。ひりひりするような日常を、分かって欲しいと思ったことはない。ただ、傍にいてくれた万智子がありがたかった。

宏志が作るカレーの匂いが漂ってくる。最近、宏志のカレーは塩辛くなった。彼の味覚にズレがではじめているのか。それとも、わたしの味覚が変わったのか。

着信音がした。東京の大学に通う理人からのラインだ。父親の病状を気遣う定期便。「変わりないよ」と短く返した。変わりない日常を、今日一日過ごせればそれでいい。

万智子からも宏志を気遣うラインが届いていた。彼女が東京へ帰る日はいつだったか……。ラインを遡ったが分からなかった。

差し障りのない文面で返信した。

夫は相変わらずです。変わらないことが、一番の進歩かな。気を付けて帰ってね。

聡美

聡美からのラインを羽田空港の到着ロビーで読んだ。宏志さん、安定なさっているようで、よかった。

いつものように、夫の和真がロビーまで迎えに来てくれた。一週間近い妻の不在は、若い頃の一人暮らしのお陰で不便を感じないと言う。むしろ、自分のペースで生活できるからと、わたしが帰福することに関して、不服めいた言葉や態度を見せたことがない。

五、六年スパンで発令される彼の転勤には家族で動いたが、次男が大学進学で家を出てからは、東京での夫婦二人暮らしになった。おそらく東京が最後の勤務地になるだろう。定年後は、そろそろ介護が必要な夫の両親が住む静岡を終の棲家にするつもりだ。

「お義母さん、変わりなかつた？」

ハンドルを軽やかに捌きながら、和真が言う。ベテランの営業マンは、相手を気遣う言葉を惜しまない。わたしは和真の横顔を見ながら、「うん」とうなづく。シートベルトを掛けるために体をひねった時の小さな違和感。何度目だろう。背の角度が微妙に違う。わたしが留守にした土曜日の午後から今日までの間に、誰かを乗せたのだ。首都高速に入ると、夫は留守中の出来事を話し始める。その中に助手席シートの件はない。

「ノンはどうしてた？」

愛猫ノンの顎のあたりの柔らかい毛並みや、ぶにゅんとした肉球の感触をイメージすると、平和な気持ちになれる。

「相変わらず甘えん坊さんだった。抱っこして欲しいとせがむんだ。毎晩一緒のベッドで肩が凝ってしまったよ」
ノンの話になると、夫の頬が緩む。二人とも猫好きだったこともあって、転勤生活に終わりが見えた時、我が家の新しい家族になったのだ。ノンを呼ぶときの和真の声は、限りなく優しい。まるで恋人の名前を呼ぶように。

◆
〈LINE/2022年12月*日〉

一週間前、宏志が亡くなりました。自宅で転倒して頭を強打し、二週間頑張ってくれましたが、意識が戻らな
いまま逝ってしまいました。コロナ禍でもあり、身内
だけで送りました。明日からまた仕事に戻ります。落
ち着いたら、また連絡しますね。ごめんなさい。

聡美

聡美からのライン。驚いた。つい二か月前は変わりないと
言っていたのに。ごめんなさいって、聡美はわたしに何
を謝っているの？

結婚後、二人で立ち上げた英語塾を軌道にのせ、これか
らという時の事故。聡美が背負ったものの大きさや重さは、
わたしの想像を超えていたと思う。夫との別れがいつ訪れ

るとも知れない恐れと覚悟の毎日を、聡美はずっと過ごしてきたのだ。聡美は、昔から自分のことをあまり語らない。あれこれ聞かれたくもないのだろうと思い、ただ彼女の問わず語りにならずに生きてきた。たとえ逐一報告されたとしても、わたしに受け止めるキャパはなかつただろう。

ごめんね。謝るのはわたしの方だ。
聡美に会いたい――。

宏志さんのご冥福を心よりお祈りいたします。

回復の方向へ向かつていらっしやるとばかり思っています。

聡美、何か困っていることはない？

わたしに手伝えること、ない？

今すぐ、会いに行きたい。

万智子

万智子、わたしは何に困っているのか、自分でもよく分からぬのよ。

葬儀を取り仕切ってくれた理人は、昨日東京へ戻って行った。この一週間の出来事が、ぼわんとした塊になって、ゆらゆら漂っている。いっそわたしも大きな塊になって、どこかへ飛んで行きたい。

一週間ぶりの教室。何から始めていいのか考えがまとまらなくて、子供達に自己紹介をしてもらった。季節外れの自己紹介に「先生、僕の名前、忘れたと?」、「みーんな、とくに知つとうよ」と、かしま。奥しい。「オール英語で、二分間スピーチだよ」と言ったら、静かになった。「顔色が悪いですよ。早く帰ってゆつくりしてください」とスタッフに促されて、教室を出た。コンビニでカット野菜と梅おにぎりを買った。何か足りないものがあつた気がしてドラッグストアに寄つたが、思い出せない。店内をうろろしているうちに、外はすっかり暗くなつてしまつた。

角を曲がつて公園の隣がわたしの家だ。隣の家もその隣の家も明かりがついているのに、わたしの家だけ真つ暗だ。明るいうちに帰り着けばよかつたのか、電氣をつけたまま出かければよかつたのか、どちらだつたのだろう。暗い家に帰るのは、こんなにも頼りないものなのか。宏志が元気だつた時も、事故で在宅療養になつてからも、わたしは何かに寄りかかつて生きてはこなかつた。たまたま夫と子供がいるけれど、たとえ独り身だつたとしても、わたしはわたしの世界を生きていける自信があつた。けれども、そんな自信はいとも簡単に崩れ去つた。わたしはわたしから裏切られた。わたしの中に確かなものなど、一つもない。

一人の家は広い。勢いよく冷蔵庫の扉を開けたら、まっ

暗い部屋に冷蔵庫の明かりが射しこんだ。がらんとした庫内に、昨日解凍したカレーが残っている。宏志が作ってくれたカレー。今夜もこれを食べよう。テレビと手に触れた室内照明のスイッチを、片端からONにした。たちまち部屋は明るく賑やかになった。テレビの中の芸人たちのおしゃべりは早口で、何を言っているのか、よく分からない。おにぎりとかット野菜にカレーをかけた。レンジでチンしたほうがよかったかな。

手帳を開いて明日の予定を見る。小さな文字が並んでいて読みにくい。おまけに付箋だらけだ。仕事に穴をあけるわけにはいかない。わたしの替わりをしてくれる人など、どこにもいない。とにかく、明日も忙しいのだ。

理人からラインが入った。

お疲れ様。しばらくはスタッフに仕事を任せて、ゆっくりしてください。誕生日のプレゼントを送りました。きっと気に入ると思うよ。理人

誕生日って……、わたしの誕生日は、まだまだ先じゃないの？ 意味が分からない。

あの子は東京でうまく暮らせているのだろうか。

◆
LINE/2023年1月*日

新しい家族です。ケントくんと言います。理人からの誕生日プレゼントです。頭をなでるとしゃべります。歌も歌うのよ。賑やかです。 聡美

松の内明け、聡美に寒中見舞いのラインを送ったら、ぬいぐるみを抱いた写真が届いた。

しゃべるぬいぐるみがあるとは聞いてはいたが、見たのは初めてだった。もふもふした茶色の毛並みに黒い目。聡美なりに気分を上げようとしているのだろうか。楽しそうな文面だが、無造作なケントくんの抱き方からは、心が感じられない。身の回りには必要最低限のモノしか置こうとしなかった聡美。しゃべるぬいぐるみと、うまく結びつかない。

あれから何度かラインを送ったが、返信はない。宏志さんを失った大きさは、わたしの想像を超えているのだろうか。アメリカではシングルでもオールドでも、身近なフレンズで支え合うスタイルが当たり前らしい。聡美も多くの友人やスタッフに支えられて、頑張っているに違いない……と
思いたい。

十年前、お母さまのご葬儀の時は、まだ中学生だった理人くん。近い将来、両親の跡を継ぐであろう彼は、東京の大手学習塾に就職が決まっていると聞いていた。しばらくは、ノウハウを学ぶ予定なのだろう。

理人くんのアドを聞いておけばよかった。

◆
〈LINE/2023年4月*日〉

頑張り屋さんの聡美。頑張りすぎてない？

ケントくんとおしゃべりをする時間を、少しわたしに分けてくれない？ 会いたいです。

万智子

朝起きてケントくんの頭を撫でたら、「サトミサンゲンキ？」と聞いてくる。二言目は「ミズヲ ノンデ」。冷蔵庫の扉に「一日一本、水を飲むこと」と理人からのメッセージが貼ってある。冷蔵庫のポケットいっぱいには並んだペットボトルの水を一本飲み干したら、お腹がぼちゃぼちゃした。

万智子、わたしは頑張り屋さんなんかじゃない。わたしはちっとも頑張れてない。

毎日、スタッフのだれかが仕事の報告にやってくる。わたしは家でじっとしている。リモート授業をしなくていい

のだろうか。

あれは、どれくらい前の夜だったのだろうか。わたしは早く家に帰りがたかったけれど、ちっとも家が見つからなくて、うろろして角を曲がったとたん、自転車に乗った高校生くらいの男の子とぶつかった。「すみません、すみません」と、その子は本当に申しわけなさそうに二回も謝るので、「いいのよ、大丈夫だから」と、なんでもないように立ち上がろうとしたけれど、立ち上がり方が分からなくて、へたりこんだ。あの子は魔法使いだったのかもしれない。だって、一瞬の間にわたしから力を抜き取ってしまったのだから。

魔法使いはおまわりさんを呼んで、わたしは病院へ運ばれた。それから、いろいろな検査をして、足と手に包帯が巻かれた。それから、お医者さんにいろいろ聞かれてすっかり疲れてしまい、少し眠ったのかもしれない。

理人が、怪我が治るまで仕事へ行かないようにと言う。大したことはないのに、大袈裟な子だ。

万智子からつぎつぎに届くライン……。
どう返信したらいい？

◆